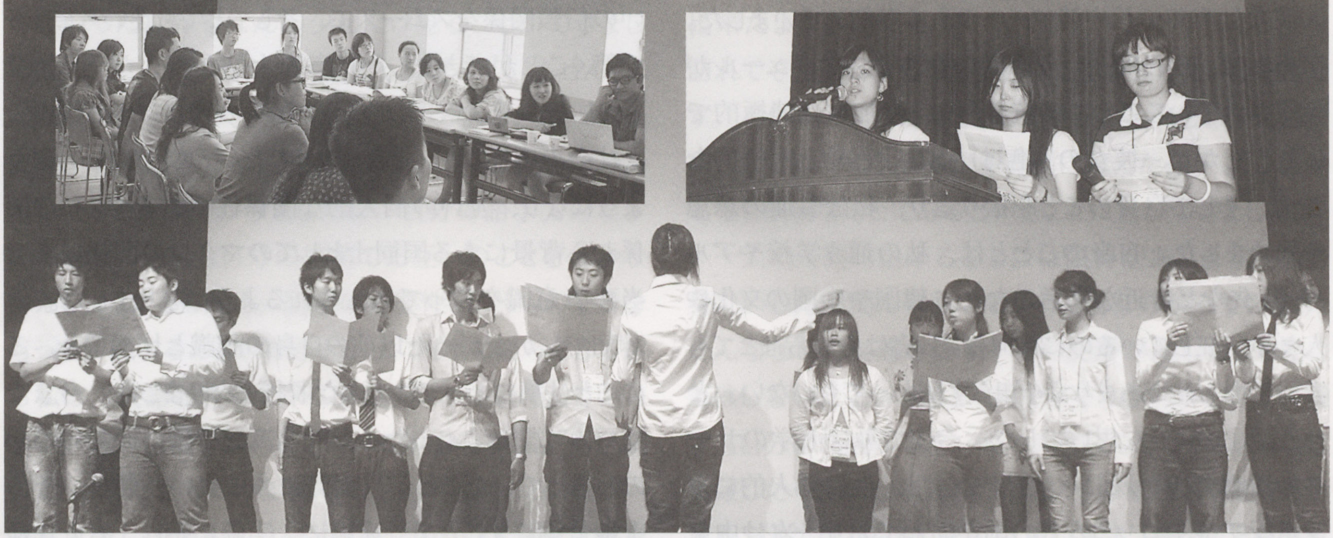
International IC Association of Japan (IIAJ)

IC NEWS No.117

（社）国際IC日本協会機関誌

発行年月日 2008 年 12 月 8 日
発 行 所 （社）国際 IC 日本協会
〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-54-14
Tel:03-5429-1156 Fax:03-5429-1157
E-mail:LEB03055@nifty.com
発 行 人 矢野 弘典
編 集 人 長野 清志
頒 価 1 部 200 円

第 5回東北アジア青年フォーラム
『 国際化の中でのアジアの平和と発展 』



去る 8 月 26 日から 31 日まで第 5 回東北アジア青年フォーラムが、本年も韓国政府の支援と韓国 MRA/IC 本部の主催で、『国際化の中でのアジアの平和と発展』のテーマを掲げて開催されました。

日本からは、青山学院、上智、一橋、明治、立教、早稲田の各大学からの 19 名、及び、現地参加の韓国に交換留学中の学生 2 名を加えた 21 名の参加がありました。加えて、「3ヶ国の平和と発展のための協力モデル」のテーマで講演者として木内孝 NPO 法人フューチャー 500 理事長、そして一橋大学の林大樹教授にもご参加頂きました。中国からは講演者として中国国際交流協会の羅毅理事を始め、河南省の鄭州工業学院の大学生 19 名（内 1 名は韓国に語学留学中）が参加、開催国の韓国からは、高麗大学を始め諸大学から 34 名が参加しました。3ヶ国のメンバーによるグループディスカッションでの率直な話し合いやレクリエーションの時間、それぞれの文化を分かち合う「文化の夕べ」等での交歓、またソウルの街を一緒に見学したり、韓国の家庭でのホームステイ等で、文化を肌で感じる体験もできました。これまでの 5 回のフォーラムで日本からの参加者だけでも延べ 100 名近くになり、このフォーラムをきっかけに、交換留学生として、あるいは、短期語学留学生として訪韓した学生も多く、またフォーラムの後も、友人たちを訪ねて相互に訪問し合うなど、その交流の輪は広く深くなっています。今回の参加者からの感想をご紹介します。

■主な内容
Contents

◇第5回東アジア青年フォーラム p.1-3
◇APYCレポート他（ソン・ホチョル氏ほか） p.4-7
◇コー世界大会レポート(中山啓介氏) p.8-9
◇コー芸術会議(鈴木恒美氏ほか) p.10
◇私のチェンジ(オルハ・フーズさん) p.11
◇私とIC（山下恭弘さん） p.12-13
◇コー・レポート(田中章博氏) p.13-14
◇神戸ミニHOHO・お知らせ p.15
◇ICニュースほか p.16

紡ぎだす、繋ぎとめる

立教大学法学部政治学科４年　久保田悠子

きっかけは、大学で同じサークルに所属する友人からの一言でした。

「韓国行かない？夏休みの予定がないなら参加してみなよ。楽しいし、それだけじゃなく、絶対に何か得られるよ」

彼女は昨年の日中韓フォーラムに参加していました。初め私は、６日間という期間の短さやスケジュールが設定されていることに抵抗もあり、参加には消極的でした。しかし、彼女の「絶対」という言葉と確信的な表情、そして自身のことを振り返り、私は参加の意思を固めました。自身のこととは、私の通う学校やアルバイト先など身近な生活のなかに韓国や中国の文化や人々が存在しているのにも拘らず、実はそれらはとても表面的なものであまり深く知らず関わってもいない、という疑念のような思いでした。今まで私は大学のサークル活動でフィリピンへ合計２ヶ月、他に個人的にカンボジアやモロッコなどの国を訪ねており、次は中東か北欧か南米に行きたいと思っていましたが、そこに韓国や中国は全く含まれていませんでした。フォーラムで韓国に行き韓国や中国の学生と交流する、という機会に直面して初めて、身近なはずの韓国や中国の互いの問題に心を痛めている「はず」であったのに、実際には興味もないし全く関わろうとも知ろうともしていない自分に気づいたのです。このことが今回の日中韓フォーラムに参加する決定的な動機となりました。

初めはやはり６日間という短い期間では、表面的な関係で終わってしまうのではと懐疑的でした。しかしながら、一緒に同じものを食べ、同じ部屋で寝、話し、笑いあう時間を過ごしていくなかで「友だち」として互いの信頼関係をスムーズに、そしてとても速いスピードで築くことができました。実際大切な友人が何人もできました。そして、だからこそ相手の背景にある国のこと社会のことについてもっと知りたい、学びたいと思うようになり、互いの個人的な関係性であるミクロの関係から背景にある国同士としてのマクロの関係にまで当事者意識を持って考えられるようになりました。

薄弱でしかなかった以前の自身の認識と比べると、このことは私にとっては大きな収穫となりました。今までは日本に閉じこもったまま東北アジアについて何のかのと言っていたことが、実際に人に会い、話し、その土地で過ごすことで、途端に、実際に感じ、考え、ゆえに説得力のある言葉、当事者意識を含んだ言葉へと変化していきます。実際に五感で感じることは、自ら考え答えを導くという作業に最も貢献することです。表層的な他人の言葉ではなく、自分の言葉を紡ぎだすことができる、少なくともその手助けにはなる、閉じこもっていたら絶対に手に入らない収穫だと感じています。

日本と韓国の参加者たちと久保田さん（左から２人目）

閉会式の後で日韓の仲間と共に写真に納まる本岩君（後列左から２人目）と山木さん（前列左）

かけがえのない経験

早稲田大学社会科学部１年　本岩　大佑

このフォーラムに参加する前の自分は、一度も海外に出たことがないせいか、隣国に対して日本との違いや共通点など全く分からず、距離的に近い東北アジア地域にも拘らず、興味を抱くことが出来ませんでした。しかし今回このフォーラムに参加したことで、自分の知らなかった世界をほんの少しだけ見ることができました。まだほんの少ししか見ることができていませんが、この一歩はとても大きく、重要なものであると思います。実際、日本以外でも友達を作るということが可能であるということが分かりましたし、自分の語学力のなさを痛感し、もっと自分の言葉でお互いのことを分かり合えるようになるため、語学の必要性というものを身をもって体感することができました。日本に帰ってきてから私は、英語と大学で第二外国語として履修しているドイツ語の勉強を始めました。これから韓国語も勉強してみようと思っています。

私は少し前から、自分とは何なのか?人生とは何なのか?平和はどうすれば訪れるのか?というようなことを考え始めていました。私の考えでは、人生の半分は自分のために生きても良いが、残りの半分は自分の周りにいる誰かのために生きるべきなのではないかと思います。では具体的に何をしたら良いか、その答えを見つけることが出来ずにいました。しかし、その一つの答えを私は、このフォーラムの中で見つけることが出来たように思います。それは、少しでも多くの国を訪れてその国に少しでも多くの友達を作るということです。子供が考えるようなことですが、自分という人間に果たして何ができるのかを真剣に考えた結果、これはとても重要なことであるということに気がつきました。

一人の人間に出来ることには限界があります。私自身たいした人間ではないということも分かっています。そんな私にも友達を作り、その友達が悲しむようなことはしない、ということならできそうな気がします。誰でも自分の友達が傷ついたり、悲しんだりするようなことはしたくないと思うはずです。その気持ちを歳をとっても忘れてはならないと私は思います。そのことを忘れなければ、きっと平和は訪れるはずだと思います。

出会い、通じ合う友情

明治大学　情報コミュニケーション学部２年　山木　愛

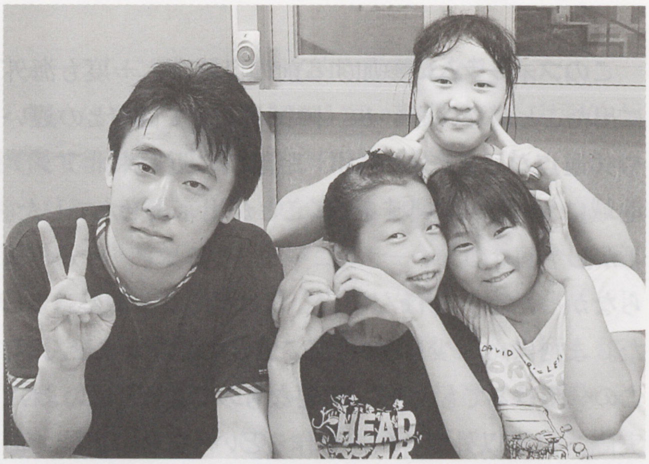
私は改めて人との出会いの素晴らしさを実感しました。出会いというのは、正に奇跡です。韓国での沢山の人との出会いが、私自身を変えました。

私は最初、韓国や中国の人達は、日本人に対して不信感や嫌悪感を少なからず持っているのではないかと思っていたのですが、私が個人的に韓国や中国の学生と話をした時、彼らはむしろ「日本や日本人が本当に好き!今は、心からそう思っている」と言ってくれたのを聞いて、私は心の底から嬉しかったです。同じ大学生というのもあり、様々な韓国や中国の学生達との友情が生まれるのに時間はかかりませんでした。言語や国籍などは関係ない、本当に大切なことは、お互いを分かろうとする気持ちだと強く思いました。一緒にご飯を食べて、遊んで、そして笑ったり、ふざけあったり一日中ずっと一緒に過ごしていく中で、私達の国を越えた温かい友情は、さらに確かな深いものとなっていきました。その証に、最後ソウルの空港で、私は彼らとの別れが辛すぎて、込上げてくる感情、溢れ出す思いを止められず、自然に涙がこぼれました。この時、私は彼らの存在が私にとって、どれだけ大きく深いものだったかを悟りました。

◇韓国ハンギョレ中・高等学校でのボランティア活動＆アジア太平洋青年会議（APYC）レポート

変化を与え、自分も変わる

ソン・ホチョル（司法修習生）



◆韓国の学校でのボランティア活動

今回私がボランティアとして行った学校は、ソウルの中心から電車とバスで３時間程の所にある、京畿道（ソウル市を含む）の南端に位置するハンギョレ中学・高等学校という全寮制の学校です。ハンギョレというのは、「1つの仲間・同胞」という意味です。学校は自然に囲まれており、IT 環境が完璧に整い、ジムも大きく、寮生活も快適という環境で、私はそこに９日間滞在しました。また学校は非常に規則正しいという印象を持ちました。

現在、韓国には350 名程度の脱北者が毎月渡ってきている状況にあり、彼らは大きく２つのルートでやってくるそうです。１つは、北朝鮮から中国に渡って直ぐに韓国に来るケースで、もう１つは、中国、タイ、モンゴル等の第三国に比較的長期滞在しながら渡って来るケースです。そのなかには、中国に 10 年も生活し、すでに朝鮮語と中国語のバイリンガルになっている子もいます。しかし南北朝鮮の言葉や価値観が全く違うため、定着教育を受けずにそのまま韓国の社会に出ると、色々な衝突や差別、偏見などを受ける可能性があります。ハンギョレ学校では、このような子どもたちのために、莫大な国家の援助の下で、定着教育と一般教育を２年ほど前から実施しているのです。

◆学校の状況と生徒たち

生徒は中高あわせて 250 人で、全員が北朝鮮からの脱北者の子どもたちで構成されていて、そのうち 30 〜 40 人が孤児です。学校のあまりのロケーションと設備の良さに、韓国人からも問い合わせが来るそうですが、当然、断るそうです。

私が学校でボランティアしていたときも、15 名程が一斉に入学してきました。新入生は、まずは併設されているハンギョレ予備学校に入学して、定着教育を1，２ヶ月受けることになっていますが、新入生を前に、校長先生が子どもたちに色々と説明をすることとなっています。

北朝鮮から来た子達の多くは、実年齢と学力の差が著しく、３年〜５年遅れている子が多くいました。北朝鮮ではそもそも生活苦のために学校へ行けなかった子も多く、17 歳で九九ができなかったり、高校生の年齢なのに足し算や掛け算の意味すらわからない子や、英語を勉強したいのだけれども単語が読めずに授業についていけず勉強がつまらなくなってしまった子もいました。このように北朝鮮においては、一部を除く公教育が崩壊しており、何の罪もない子どもたちが空腹のまま、満足な教育を受けられずに生きていかなければならないというのが現状なのです。

そんな彼らに学校側は、教員数が不足している中でも、どうにかきめ細かい教育を施したいと考えているのですが、一方で援助をする行政側は進学率等の結果だけを求めてくるため、厳しい状況が続いています。それでもなお学校側は、予算内で試行錯誤を重ね、例えば今回のように、個別指導が必要な状況にある学校側と、ボランティアを志望したこちら側のニーズが上手く合致した形で学校でのボランティア受入が実現したのでした。

◆マザー・パクとの出会い

私がハンギョレ学校でボランティアを終える前日の8月1日の昼に会うことになりました。学校から車で 40 分ほど行くと道路標識にも標示されているマザー・パクの住まいが見えてきます。1，２階にはマザー・パク

マザー・パクを訪問して
（左から）ホチョルさん、マザー・パク、ヒジンさん

文化の夕べで韓服を着て

の半生と活動の歴史を描いた博物館が、３階には彼女の住まいと礼拝施設があります。自然に囲まれ、建物の外観も白で包まれた居心地の良い家でした。マザー･パクは、韓国国内に３つの学校を建てています。1つは、ボランティアに行ったハンギョレ中・高等学校、２つ目はマザー・パクの家に併設されている学校で、これと同じような学校が全羅道にもう１つ建てられています。

この３つの学校とミュージアム兼住まいは、全て彼女の意思に賛同する円仏教の元教え子や政治家、経済人、教育者からの寄付によって建てられたものです。３階へ行くと、彼女は笑顔で、さぞ自分を待ちわびていたかのように暖かく迎え入れてくれました。私がなぜ学校でボランティアをしたいと思ったのか、どのような環境で育ったのか、日本のICの状況はどうなのか、彼女の日本にいる友人たちとの出会い等々の話をさせて頂きました。

その後博物館を見学したことで、彼女が貧困・教育問題について宗教の枠を超え、様々な国における取り組みを行ってきたのだということを実感しました。マザー･パクは、学べず、食べることすらできない人たちに救いの手を差し伸べることに関しては、もはや宗教は関係ないということを切々と説いてくださいました。

◆ APYC（アジア太平洋青年会議）

開会式では参加メンバー約 80 名が色とりどりの民族衣装を着て登場し、さながら舞踏会のような様相で頻りにカメラのフラッシュが焚かれていました。開幕式の終りには、ハンナラ党の国会議員の方にお会いし、日本と韓国のIC国会議員連盟を作るので、その時は韓国のNGO「変化への第一歩」のヨンヌクさんと私に連絡役を頼むという話を受けました。本当に近い将来、ICの国会議員連盟が結成され、アジア諸国の外交がより良くなることを願うばかりです。

◆文化の夕べ

２日間に亘る文化の夕べでは、各国の参加者が伝統的な歌や踊り、自国の紹介をしましたが、どれも華やかで綺麗でした。私は韓国チームに交じってアリランを歌い、日本チームと一緒に「世界に一つだけの花」を歌わせて頂きました。自身の北朝鮮の文化紹介では、朝鮮の歌を歌うことにしましたが、何を歌えば良いか悩んでいるところに、韓国チームが手伝ってくれました。歓迎の意味を込める明るい歌と祖国統一を祈願する歌の２曲を選びましたが、特に「パンガッスンミダ」（お会いできて嬉しいです）の方では、日本とインドICでインターンとボランティアの経験もあるヒジンさんが韓国の女性陣をまとめ上げ、北朝鮮式のすばらしい振り付けまで考えてくれたのでとても助かり、素晴らしいものに出来上がりました。韓国の女性は非常にパワーがあって、結束力が高いなと感心しました。そして曲の紹介の英訳文や音楽は日本の方のおかげで、何とか華のあるものに仕上がりました。北朝鮮の国籍は私１人でしたが、自分は決して１人じゃない、韓国人と日本人の皆が私を助けてくれたと、感謝の気持ちで一杯です。それに今年のIC国際会議にも参加したチェナムさんが貸してくれた韓服を久しぶりに着て舞台に立ち、観客総立ちの大歓声の中で歌うことができました。舞台の上では、男1人に韓国の美女軍団８人というメンバー構成だったので、男性

陣から容赦のない妬みとブーイングを買いました。

◆ワークショップ〜静かな時間〜

APYC の期間中、午後のワークショップが設けられていましたが、私は久しぶりに「静かな時間」を持ち、自分について考えてみる機会となりました。静かな時間の中で、私自身のアイディンティティについての想いや将来どのように生きていくべきか等、様々なことが浮かんできました。

〈私心を捨てて何かに命を掛けて尽くすことができるのだろうか〉〈常に世界の中に自分がいるということ、世界の中の日本、韓国、アジア…〉

このような考えが頭の中を駆け巡る中、ある夜、知人から私の深層心理の核心を突くような質問を投げかけられたのです。「法律って面白いか?もしかしたら、何か義務のようなものを背負って無理をして勉強していないか、生きていないか?」

正直、自分以外でその問題について端的に指摘したのは、その方が初めてでした。あまりにも的確だったので驚きましたし、何か全てを見透かされているような気がして、しばらく声が出ませんでした。私も感じていたことですが、私の将来への展望はある意味で義務感から発しているものでしたし、私のやりたいことと、やらなければいけないことは別なのだということに気付いていました。ただ義務感から来る将来像について、なかなか離れることができないまま、現在に至っていたので、自分の中で芽生えていたやりたいことへの気持ちとの葛藤が続いていたのです。

やがて時間を置いてゆっくりと考えているうちに、頭の中が少しずつ整理されていきました。そしてAPYC最後の夜に、私がこの「静かな時間」に考えたことについて、皆ととても良いシェアリングができました。

◆「変化の一歩」

今回私がAPYC に参加して、統一問題や日韓問題、在日コリアンについて無関心だった多くの韓国の友達が、少しずつですが関心を持ってくれて、大きな反響があったと思います。私が皆に自分の思いをシェアすることによって、その思いが心に響いて周囲が自分を変えようという思いを持つようになったとき、初めてそこに私の存在意義を感じることができました。彼らに与えた「変化の一歩」こそが、私に在日コリアンとして生きる意義を教えてくれましたし、それに気づかせてくれた韓国チームには感謝しています。今後、韓国の皆さんが、私の言葉から始まり、素晴らしい変化をきっと遂げ続けてくれると私は信じています。また、自分が在日コリアンであることに誇りを持ち、胸を張って肯定的に生きなければならないという思いに至ったことです。これは私がAPYC を通じて感じた一番大きい変化だと思います。今回、私に変化をもたらせてくれたAPYC に感謝いたします。

◇アジア太平洋青年会議(APYC)2008・レポート

クロージング・セレモニー(Closing Ceremony)でのできごと

佐々木　淳

8月15日、7日間にわたるアジア太平洋青年会議(APYC)も最終日を迎えました。この日は韓国の独立記念日で祭日、さらに3連休の初日、渋滞によるバスの配車遅れで、ソウル到着も遅れてしまいましたが、それでも各々民族衣装(私は浴衣)に着替え、閉会式が始まりました。

APYC での体験のシェア、スライドショーの上映、アイ・ケア(I-Care)キャンペーンのプレゼンなどが行われ、このキャンペーンの説明を含め、地元の韓国人

クロージング・セレモニーにて(一番右が佐々木さん)

への報告という色が強かったように感じました。そしてこの中でのハイライトは、各国代表4名による体験発表でした。タイ人のCVD（カンボジア・ベトナム・ダイアログ）に関すること、また、チベットの人が中国人に対して憎しみを持っていたことを謝罪したことでした。もう一つは、韓国の方が、ミュージック・ワークショップで作った歌の発表に続いて、涙ながらに南北朝鮮統一の夢を歌にして披露したのが印象的でした。

最後に、私の発表です。発端は、午前中に全員の前でシェアしたことから始まりました。当日は8月15日終戦記念日。韓国においては日本からの独立記念日です。そこで、この記念すべき日を韓国の友達と一緒に過ごせることを感謝し、各々に色々な背景や思いがある中で、過去の歴史の問題に対して少なからず苦しむ友人の姿を見てきたことに対して、謝罪の言葉を述べてみようと思いました。

私は国を代表しているわけでも、日本国によって行動を何か決められるわけでもありませんので、私の個人としての気持ちを述べてみようと試みました。それまでは長年、謝罪の言葉を簡単には口にしたくないと思っており、反対に単に謝罪の言葉を発するのは容易いとさえ考えていました。ところが、全員の前に立った途端に、恐怖を覚えました。人前で緊張することのない僕が、体の震えを感じました。その時突然、謝罪の言葉を発すること自体が自分の恐れなのだと気付きました。一緒に参加したソン・ホチョル君の言葉を借りれば、ここ数年の重みが言葉に乗り移ったのかも知れません。そして、今突然、自分の中の恐怖に気づいたこと、そしてこれは乗り越えるべきものであると承知していることを話した上で、自分の気持ちを述べました。話し終えると、不覚にも、涙があふれ、周りを見ると、会場も涙に包まれていました。

これをもう一度整理しなおし、クロージング・セレモニーで発表しました。特に謝罪の部分は、日本にも滞在経験のあるヒジンさんに協力してもらった上で、韓国語で挑戦しました。正直、謝罪のことで頭がいっぱいで、その他のことは、よく覚えていません。けれども、話し終えた後はとても清々しい気分だったことだけは記憶しています。

2002年の小田原会議で感じた事を素直に話し、仲間と日韓の活動を始めて6年、単に日韓両国の関係を話し合うだけでなく、お互いを深く知り、本当の意味での友人になり、チームとして一緒に何ができるか、ということを考えてきました。お陰様で、今韓国に親友と呼べる友人が複数できました。もちろん日本にも同じような仲間がたくさんいます。今度は、彼らと一緒に何ができるか、考えていきたいと思っています。

〈次回のAPYCのお知らせ〉

2009年第14回アジア太平洋青年会議（APYC）が台湾で開催されます。国際IC日本協会では、日本からの参加者へのサポートを行っています。熱意ある青年たちの参加をぜひお待ちしています。

詳細についてのお問合せは、（社）国際IC日本協会事務局まで。

◇コー・世界大会レポート

グローバル世界における信頼と安定へ向けて

中山　啓介

コーポレート・リーダーズ・ワークショップ（CLW）で得た結論を、続いてコーで開かれた「世界経済における信頼と誠実に関する会議」で報告する参加者（左から、中山氏、横河電機の佐野執行役員・企業倫理本部長、キヤノンの山下顧問、インドのイラニ博士、橋本会長、スイスの Implenia AG のケックラン名誉会長、全日空の五嶋執行役員·CSR 推進室長、同、東川 CSR 推進室アシスタントマネージャー）

今年のコー世界大会のテーマは「人間の不安の根本原因に立ち向かう」で、会期は７月３日より８月17日までの６週間、週毎に個別のテーマが設定され、１から６までのセッションで真剣かつ有益な討議が行われ、ICならではの人的交流が重ねられた。私は第２セッション「グローバル経済に於ける信用と誠実」－知恵を育み、行動を産み出す－の中の特別分科会（企業経営者によるワークショップ）と全体会議に参加した。

〈コーポレート・リーダーズ・ワークショップ（CLW）〉

アメリカのサブプライムローンの破綻により始まった世界レベルの金融危機は、連日のように株価を始めとする金融指標は大きく上下に揺れ動き、収まる気配を見せない。この潜在的脅威こそは、この夏 CLW に参加した人達の主要な関心事でもあった。

今回のワークショップは、スイスのICプログラム·ディレクターを務めるＣ・シュプレング氏の提唱により開催されたもの。欧州からはスイスと、アジアからはインドと日本のビジネス関係者 11 名が参加。７月 10 日から 12 日まで延べ３日間に亘り、充実した討議と体験交流が行われた。昨秋、インド・パンチガニの IC センター(アジアプラトー) で開かれた CIB(2) の会議で、日本とインド、日本とスイスとの間に友好関係ができた。このことから、シュプレング氏から橋本会長に本ワークシップへの参加要請があり、これに応じる形で橋本会長以下６名の参加が実現したものである。

初日のワークショップは、シュプレング氏による趣旨説明から始まった。特に、インド・タタ財閥の重鎮イラニ博士（タタ製鉄の元社長）の問題提起である、「短期の利益を重視する経営は破滅を招く」との警告を重く受け止めたものであることが強調された。次いで、今回の共同モダレーターを務めた J.P. ミーン氏（SGS グループ法律顧問）の司会により、第二次世界大戦後から今日までと、特に 2001 年の 9.11 テロ事件以降現在我々が直面する世界情勢について、鋭い分析と骨太の討議が行われた。その後、キヤノンの山下顧問による同社の事例紹介、イラニ博士によるタタの事例紹介が行われた。それぞれが世界企業として発展する過程での、両社の企業理念と経営の実績は、企業の社会的責任を重視する企業経営のモデルとして、示唆に富むものであった。次いでドーハラウンドと呼ばれる WTO の関税交渉でスイス政府の代表を務めるＬ・ワセスチャ大使より、当事者が国益を越えて交渉できるかどうかの瀬戸際にある旨交渉の内実と共に見通しとして妥結の見通しが低い旨が語られたが、その通りになってしまった。

２日目も午前中は、再度重要事項についての討議が行われ、午後文案のまとめ作業、夜再度確認したうえ

で、「コミュニケ」としての合意が得られた。その内容は翌12日の全体会議で発表され、続いてフォーラムの形式で、参加者との間に活発な質疑応答が行われた。

そして参加者は、「世界経済における信頼と誠実に関する会議」(2008年7月11日～16日コーで開催)に対し、ビジネスがどのような貢献を果たすかについて、

○会計・商取引上をも含めた信頼関係の構築
○中期的・長期的な思考
○明確な価値観に基づいた企業風土・文化の形成
○従業員に対する教育訓練と公平な処遇
○企業の地域社会への貢献

等の提言を行うに至った。

全体会議でのパネルディスカッションの様子

〈文化の夕べ〉

文化の夕べは大会最終日の前日(16日)の夜に予定されていた。テーマは、“Celebrating Our Diversity(われわれの多様性を祝祭しよう)"というものであった。日本を表現するために、一つは純日本的なもので、もう一つはより世界に広く共通するものを、という観点から「北海盆唄」とベートーベンの第9「歓喜の歌」の2つを披露した。

当日は、扇子を使って「扇の要」を示し、日本の皇室が2千年来、日本という国の統合の象徴として、いわば扇の要役を果たしていることを説明した。次いで、皆にも手拍子をお願いして北海盆唄を披露した。

2つ目の「歓喜の歌」では、日本では正月が近づくと、特にその前日の大晦日には全国のあちらこちらで、この「喜びの歌」がドイツ語で歌われることを前おきした後、ドイツ語で独唱したところ大好評で、終了後、受付や翌朝ダイニングホールなどで出会った時、意外な人々から褒められたり、驚かれたりした。この反応は意外であったと同時に、さすが音楽の本場ヨーロッパだとこちらも逆に感心した。かくして、コーでの文化の夕べの体験は殊の外楽しい思い出となって、私の心の財産になった。

コーポレート・リーダース・ワークショップ(CLW)の参加者たち

コー世界大会・レポート

～芸術会議に参加して～

◆鈴木 恒美（小学校教諭）

今年もレマン湖が優しく迎えてくれました。顔なじみの人も増え、安心したせいか、色々考える余裕も出てきました。地球が英語一色で塗られようとしている今日、この会に出ると、日本は小さな国だけれど、素晴らしい言葉があり、最高に美しい文化があることをどうしても世界の人に伝えたくなります。

今年は茶の湯と折り紙細工で「もてなしの心」を伝えることができました。ワークショップでは、人形劇に入り、「世界市民」を感じることができ、次の時代の子供たちに教育者として指導する自信をもらったように思います。毎回出席するたびに、ひとまわり、ふたまわりと大きくなっていくのを感じています。

◆マリアンネ 和田（英語教師）

コー世界大会に参加するのは今回で５回目ですが、本当の意味で参加者として参加できたのは、今回が初めてです。芸術会議の参加は３回目で、10あるワークショップの中から、好きな内容のワークショップを選んで参加することができました。今回の芸術会議のテーマは「芸術家は崩壊された世界を修復することができるのか」で、30カ国余りから約250名が参加しました。全体会議では様々な分野で活躍をする芸術家の人達が、仕事を通してどのように社会に貢献しているかということを毎日語りました。私も話をする機会を頂き、今日様々な問題に直面した際に音楽で学び培った創造力を生かして如何に問題解決をしているかということを話しました。また、茶道と実用折り紙のプレゼンテーションでは、日本式のお客様に対する心遣いや思いやりの心を紹介することができました。どちらのプレゼンテーションにも多くの方々が参加し、日本文化の良さを感じ取ってくれました。音楽会で素晴らしい演奏を鑑賞したり、黒人奴隷に関しての演劇を鑑賞したりし、多くを学びました。古い友と再会し、新しい友に出会い、有意義な時間を過ごすことができました。

日本文化のプレゼンテーションで、
お茶を点てる鈴木先生とそれをふるまう本宮さん

◆本宮 共（高校生）

今回初めてこの会議に参加しました。７日間世界各国から集まってきた人達と生活することによって国籍や言葉、信仰する宗教が同じでなくてもお互いがお互いを尊重し合い、協力し助け合っていく事が出来るのだなと改めて感じました。この経験を今後の生活に活かしていきたいです。

またワークショップでは皆と協力して一つのダンスを創り上げていく面白さを学び、完成したときの喜びを感じることができました。今回学び、感じたことを生かし世界の平和のために少しでも何か行動していきたいと強く思いました。

◇私のチャレンジ　―ウクライナからの手紙―

問題に隠された本当のこと

オルハ・フーズ（ウクライナ・リヴィウ国立工科大学）

この夏、第31回国際会議と小田原の学校訪問プログラムに参加するために初めて日本に滞在しました。そしてとても温かい歓待と美しい日本で実りある感動的な時間を過ごしました。

日本から帰るとすぐに、大学で 2つ簡単なテスト（その時はそう思っていたのですが）を受ける予定でした。

しかし状況は一変したのです。先生が、最近私たちのクラスで何か誤解したまま、怒り心頭という状況でした。事実、その先生は大学中の皆が恐がる存在でした。そんな訳で私はクラスの代表として、気づかないうちに、この問題に巻き込まれることになってしまいました。

そして成績を貰うために先生の所へ行った時のことです。先生の態度があまりにも威圧的だったので、私は思わず目に涙を浮かべ、「なぜこんな屈辱を受けなければいけないのか」と自問しながら、教室から飛び出してしまいました。私はベンチに座りながら、冷静になろうとしました。そして解決法を探していました。すると、ある考えが浮かんできました。それは祈ること、そして前向きな行動をすること、そうすれば、すべてがうまく収まる、という考えでした。

その時、東京でアリス・カデール氏(ジュネーヴ在住のICの国際トレーニング・オフィス・ディレクター）のワークショップを受けた時の問題解決の方法を思い出しました。

まず、先生と私との両方にとっての本当に必要なことを書き出すことから始めました。一つひとつ、心の奥深いところまで、考えていきました。

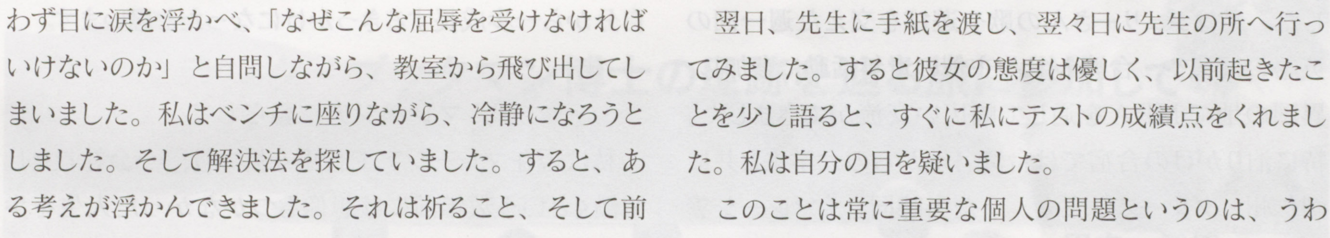
テストの点というのは、今の問題の中では重要なことではなく、先生にとって本当に必要なことは、自分自身を愛し、そして他からも愛され尊敬されることではないかと思いました。実際、私の問題も同じことでした。皆を代表して私が書こうと思っていた先生への不平不満を告げる手紙は、先生の真の要求には沿わないということが解りました。自分が成績の点数を貰えたとしても、それは問題の解決にはならないと気づきました。

家に帰って、夜に先生に自分の気持ちを正直に表す手紙を書きました。先生に対する愛と尊敬の念についても書き、その手紙を日本の素敵な模様で飾りました。それからクラスの友人たちと一緒にその状況について祈りました。

翌日、先生に手紙を渡し、翌々日に先生の所へ行ってみました。すると彼女の態度は優しく、以前起きたことを少し語ると、すぐに私にテストの成績点をくれました。私は自分の目を疑いました。

このことは常に重要な個人の問題というのは、うわべの言葉や行動の裏側に隠されていることを見ようとすること、また、いつもそこには問題解決のためのいくつかの方法があることを忘れてはならない、と私に教えてくれました。衝突というのは、時には家族の中にも同様に起こります。これからは私の周りの人々にとって本当に必要なことというのを見つけ出すことができる様になりたいと思っています。

追伸ですが、今日も先生の側を通った時、先生は私ににこやかに会釈してくれました。



世田谷 IC ハウスで行われた "問題解決のワークショップ" にてオルハさん（後列左から2人目）とアリス・カデールさん（同列左から4人目）

◆私とIC

山下　恭弘

私は今年の４月よりマレーシアの日系企業で働いています。今回私がICに係わることになった経緯を皆さんにお伝えする機会を頂きましたので、ここに紹介いたします。

台湾ICとの出会い

私が初めてICと出会ったのは台湾留学時代の事です。今から５年前の2003年、私は台南市にある成功大学に中国語を学ぶために留学していました。そこで同級生であったジュリー・タンさんを通じてIC（旧MRA）と出会うことになりました。ジュリーさんはマレーシアの華人で、当時は台湾のMRA事務所に駐在し、各種活動を指導しながら中国語の勉強をしていました。私はジュリーさんの歌や遊びを交えた週一回の英語の授業や、台湾MRA主催の青年活動に参加し、異国の地でMRAを通じて幅広い交流ができました。特に泊りがけの合宿では台湾各地からの大学生と共に劉仁州・グレースご夫妻、また当時同じくマレーシア華人で台南に駐在していたナンドールさんにご指導頂くことが出来ました。しかし、私の留学も半年を迎えたその年の夏、SARS（サーズ）が流行しました。私の居た台湾南部も危険な状態にあるという判断で日本の大学から帰国命令が出され、しぶしぶ一時帰国することになりました。これを聞いたジュリーさんは、良い機会だから小田原のIC国際会議に是非参加するように言いました。不幸が一転、ここでまた日本のICの方々や他の沢山の皆さんとお会いすることができました。

ICで学んだこと

私はこれまでに2005年と2006年の小田原のIC国際会議や2005年の日中韓青年フォーラム、東京のIC事務局でのお話会等の活動に参加してきました。ICの活動を通じて、私は沢山の経験をさせて頂き、成長できたと思います。その中で得た一番の宝物は人との出会いだと思います。普段なかなか交友関係を持つことができないグループの人たち、また違う世代の人たち、そして違う国の人たちとの出会いは、私にとって大きな刺激となりました。特にICの活動を通じてこれまでの経験を分かち合い、真剣に議論する機会を頂けたことは、今の自分の形成に大きく影響していると思います。

ICで学んだ大切な信条の一つに、〈自分の行動や考えを変えることで世界を変えていくことが出来る〉というのがあります。これはつまり「自分が問題解決の一部分にならない限り、自分は問題の一部であるに過ぎない」という認識だと思います。問題はどこにあるのか、それを解決するには、先ず私はどうあるべきか、これに気づいたことが文句を言うだけで留まっていた昔の自分から一歩成長するきっかけになったと思います。

マレーシアに暮らして

私は現在マレーシアで仕事を見つけ、一会社員として働くという数年前には想像もつかなかった人生を歩んでいます。マレーシアに来たのは、特にジュリーさんから誘いがあった訳ではないのですが、以前彼女を

2008年８月にセレムバンのジュリーさんの友人宅にて
山下氏（右から２人目）とジュリーさん（中央下）

訪ねてマレーシアを訪れた際に印象が良かったというのも大きいと思います。

こちらにはアカシャ（AKASHA）というICの事務所がクアラルンプール郊外にあります。現在ここでナンドールさんが駐在し、家庭や家族に関わるワークショップや会議等の活動を行っています。不安と期待一杯でクアラルンプールに到着した当時、ちょうどジュリーさんがそこに長期滞在しており、IC関連のお友達を沢山紹介して頂きました。初めて参加したIC関係のホームパーティーでは、マレー系・中華系・インド系・インドネシア系の方々に日本人である私も加わり、皆で歌って踊って楽しく過ごし、改めてマレーシアは素晴らしい所だと思いました。

ここマレーシアは多民族社会で、上のパーティーで集まったような様々な人種と信仰を持った人たちが集まって社会を構成しています。そして、会社·娯楽施設·レストラン・住宅地のどこを見ても実に様々なグループが一緒になって空間を共有して生活しているため、相互の理解と尊重は社会の成立において必要不可欠です。また、貧富の差が激しく、富裕層と貧困層の歴然たる差は当たり前の事実として受け止められています。

こうした環境で生活していると、日本で生活していると気づかないような不便さを感じ、気遣いが必要になります。例えば、地元の人達と話をしていると他のグループの批判を聞かされることが多々あります。外国人である私はいつも板挟みになるのですが、こうした話を聞く度にこの国の複雑さを認識させられます。また一方で、人種毎の特性や社会階層毎に果たす役割を考えた時、どの人たちもお互いを必要として支えあって生きている事実を強く認識せざるを得ません。30歳になる前に国外で見識を深めたい、という思いで日本を飛び出した訳ですが、半年経った今、日々本当に良い勉強をさせてもらっていると思います。

今後もICで学んだ信条を持ち、世界を変える一歩を歩む一人として、より良い社会の創造に寄与できればと思っています。

フランク・ブックマン博士の足跡を辿る旅に参加して

田中　章博

ツアーの他の参加者たちと田中さん（一番右）

足跡をたどる旅へ

ブックマン博士がIC（MRA）活動をスタートさせる契機となった啓示体験を得てから今年で100年目となる。これを機にその足跡を辿ってブックマンの教えとは何だったのか、そしてIC活動の今日的意義について考えてみようというグループ旅行が6月17日から7月9日までヨーロッパで行われた。12カ国より18人が英国マンチェスター空港近くに集合し、チャーターした小型バスに乗り込んで最初の目的地、英国湖水地方の町ケズウィックに向かった。

参加者の国籍は米国、ロシア、ルーマニア、モルドバ、コスタリカ、英国、セネガル、インド、オーストラリア、韓国など多彩である。ほとんどのメンバーはすでにIC主催のアクション·フォー·ライフ（AfL）やスイスのコー、

インドのパンチガーニ等での会議に参加しお互いに顔見知りであったが、私だけは今回の主催者・リーダーであるマイク＆ジェーン・ブラウン夫妻とオーストラリアからの参加者以外は初対面の人々であった。

ケズウィックの教会

ケズウィックの町外れでブックマンが啓示体験をうけて人生をチェンジすることとなった教会を見た。この建物は現在も教会の形をとどめているけれども内部はアパートに変わっていて、ブックマンの名やIC（MRA）を記念する表示はどこにもなかった。この町に数日滞在して、イギリス各地から集まった人々と共に３日間会合を持った。フランク・ブックマンの教訓と現在の世界・社会の問題などをテーマに話会いが行われ、イスラム教導師やアフリカ出身者からの発言もあった。滞在中ブックマンが散歩をして巡ったという湖を訪れる機会もあった。

オックスフォードからヴィスビーへ

次に訪れたのはオックスフォードである。当時のオックスフォード大学卒業生がブックマンのもとに集まって協力者となり、IC活動の初期には彼らが中心的に活動したため、その組織はオックスフォード・グループと呼ばれた。大学内の教会を使って会合が開かれ、ブックマンが社会改革運動を始めた当時の歴史的社会的背景の説明や、彼と人生を共にして活動をしてきた93歳の方からブックマンの思い出などについての話を伺った。また偶然ではあったが、アフリカで活動を続けてきたIC専従の若い女性（フィオーナ・レゲット）の葬儀がロンドンの教会で行われ、我々旅行グループ参加者もこれに参列した。イギリスはもちろん世界各地から300人ほどのIC関係者が彼女の死を悼んだ。それからスエーデンのゴットランド島に船で渡り、ヴィスビー郊外に宿泊して数日間の会合があった。ブックマンは1938年ヴィスビーの古い教会で集会を開き、2000人が集まったと言われている。

ブックマン終焉の地

今回の会合にはスカンディナビア諸国のみならずバルト３国やロシアからの参加者もいた。その後一行はドイツのフロイデンシュタッドに移った。この地はブックマンがしばしば滞在し、かつ彼の終焉の地でもある。我々は彼が宿泊し、最後を過ごしたホテルを訪れた。このホテルから少し離れた小高い草原にブックマンの記念碑が建てられていたが、ホテルは現在使われておらず建物は売りに出ていた。フロイデンシュタッドではドイツ人とフランス人が参加して会合をもった。いずれも古くからIC活動に参加してきた人々である。そこで第２次大戦後の独仏融和の活動やベルリンの壁崩壊後のドイツ統一の話を聞くことができた。

スイス・コー世界大会

ドイツの次は最終地スイス・コーにあるマウンテンハウスで「グローバル・サーヴァント・リーダーシップ」をテーマとした一週間の会議に参加して７月９日にグループ旅行の全行程を終了した。今回訪れたいずれの国の会合も比較的高齢の参加者が多く、IC活動の歴史の一端に触れた感じがした。ブックマンと人生を歩んできたイギリスの元外交官は、博士が口癖のように繰り返し述べていた教えを紹介してくれたが、それは私の心に強く印象づけられた。

第一は「組織やプログラムよりもまず人を第一に考えよ」、第二は「グループで旅行をしてお互いの理解と協力関係を深めよ」、第三は「重要なのは仲介ではなく変革である」そして第四に「人に影響を与えるのではなく人を惹きつけよ」という教えである。ブックマンというカリスマ性を持った人が亡くなって47年、そしてIC活動に参加する大部分のメンバーが彼を直接知らない現在、ICそのものの活動も変わってきた。社会情勢・国際情勢の転換等の時代の変化に伴い、人々の価値観も変わり、取り上げるテーマも変わってきている。しかし、ブックマンが強調したのはモラル・アンド・スピリチュアル・ムーヴメンド(Moral and Spiritual Movement)であり、この場合のスピリチュアルとは精神性というよりも霊性に近い。各国での会合での発言には“God”（神）という言葉がしばしば口にされ、聖書の引用もしばしばなされた。クリスチャンでない私に参加者の一人が心配して「貴方はクリスチャンでないが、こういう話の場に参加して違和感はないか?」と尋ねられた。私はICでいう「正直、純潔、無私、愛」の４つの道徳基準は仏教でも同じであり、なんら違和感はないと答えた。

今回の旅行を通じて、私はブックマン博士に今まで以上の理解と親近感を育み、またIC活動を通じて社会改革運動に人生を捧げてきた人々の情熱と真摯な態度に心を打たれた。

神戸ミニ HOHO・レポート　～新しい地に根を下ろす～

“素直に表現できる場”

神戸ミニ HOHO が 10 月 11 日（土）～12 日（日）に有馬温泉メープル有馬にて初めて開催されました。主催は、グリーンハウス㈱佐伯 祐季氏で、ミニ HOHO の３本柱となる「講演」「ストーリーテリング」と、翌朝の「静かな時間」の体験や全体ミーティングを含んだ１泊２日のプログラムは良く準備され、スムーズな司会の下に快適な時を過ごしました。

今回は 30 名の参加者のうちの多くが 20 代～ 40 代の青年たちだったことが印象的でした。彼らからは、親から受けたり、生まれてきてから世の中から受けたりしてきたものを背負いながら、必死に自分の夢や未来を見つけるために努力する姿勢が強く感じられました。初めてストーリーテリングや「静かな時間」を体験した参加者の感想からは、次のような変化を読み取ることができます。

・自分の内ばかりに目がいって、行き詰っていましたが、他の人の経験を聞き、周りに目をやることを思い出し、世界が広がりました。

・自分が恥ずかしいと思っていた部分も受け入れてくれたことに感動しました。自分の人生だけでなく、他人の人生も愛しいと感じました。

・自分の人生を語ることで、もう許しているつもりだったことが、実はまだ涙が出るくらい自分の中で消化できていなかったことに気づいたり、心にあるひっかかりが整理できました。

・ストーリーテリングで吐き出したことを「静かな時間」で整理できました。

「静かな時間」には早朝６時 30 分から１時間が充てられましたが、体験した後は皆さわやかな表情で、「自分自身に対して丸１時間を貰えたことが嬉しかった」「青い空が美しいと感じた」等、忙しい日常の中で立ち止まることの大切さを多くの方々が語りました。

全体としての感想では、個々にご自分なりの収穫を得た様子が伺えます。

・人は皆、各自が色々なプログラム（使命）を持ち、各々色々な環境で生きてきたけれど、全て底辺ではつながっていると感じました。

・“平和になることとは嫌いな人をなくすこと”という言葉が印象に残っています。

最後の全体会合では、全員が穏やかな感動に満ちた様子で、素直な表現で臆することなく語る一人ひとりのまなざしに、生まれたばかりの新しい絆を感じました。（高橋）

〈第 14 回ミニ HOHO—心を育てるネットワーク－開催のご案内〉

日　時　：　2009 年３月７日（土）～８日（日）

会　場　：　佐賀県唐津市

社会の場でも、家庭の場でも、心を大切にして自分の心のありようを時には立ち止まって、みつめることが必要です。心を開いて、人の声に耳を傾けると、自然に他の人の人生が心に入ってきます。自分の人生を語ることにより、自分を整理し、前に向かうことができるでしょう。生きる力の源となる心を育て、育て合う場が、ミニ HOHO です。自然豊かな場所で、日頃の疲れを心身ともに癒し新たに出発するパワーを蓄える旅に出かけてみませんか。皆様のご参加をお待ちしています。（HP） http://www.initiativesofchange.jp/

＊日本ミニ HOHO に関するお問い合せは、（社）国際 IC 日本協会 事務局 まで。

訃　報

日本にMRA（ICの前身） を伝えたパイオニアのお一人であった当協会の相馬雪香名誉会長が去る11月8日に逝去されました（享年96歳）。「日本を世界の孤児にしてはならない」といつも世界の中の日本のあり方を考えられ、ICの精神で難民救済や日韓の女性の友好等々、様々な活動の先頭に立ってこられました。ここに心よりご冥福をお祈りいたします。

◇◇◇ICニュース◇◇◇

■新会長の就任

去る11月7日開催の第67回理事会において、橋本 徹会長が会長を退任し、矢野 弘典副会長（中日本高速道路㈱会長） が新会長に就任（任期:平成20年11月8日より平成21年12月31日） することとなりました。

《学生インターン・ボランティア制度について》

国際IC協会では、インドICセンターやスイスでの国際会議にてインターン生及びボランティアとしてICの会議の運営をサポートする活動を行い、それを通してICの精神や活動、語学などを学んでいく機会を提供しています。詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

《入会のご案内》

IC(イニシアティブズ・オブ・チェンジ Initiatives of Change 、前身はモラル・リアーマメント Moral Re-Armament(MRA)) は、1938年にロンドンで発足して以来、〈対立する相手や国を変えたいと思うなら、まず自分や自国から変わるべきである〉という理念に基づき、あらゆる民族、宗教、文化の根底に流れる共通の倫理観（モラル） を普遍的な〈正直・純潔・無私・愛〉という４つの絶対標準としてまとめ、それをもとに世界各国で紛争等の問題解決に不可欠な相互の信頼関係を醸成する活動を進めてきました。国連の認定を受けた国際NGOとして、世界50カ国以上で活動しています。

○正会員（総会に参加し、議決権を行使できます）
　個人会員　年額　6,000円
　法人会員　年額　50,000円

○賛助会員
　個人会員　　3,000円以上
　法人会員　　50,000円（一口）以上

会費・寄付金の振込先
1. ゆうちょ銀行　〇一九店 当座預金
　口座番号/019-0038289
　口座名/ｼｬﾀﾞﾝﾎｳｼﾞﾝ ｺｸｻｲｱｲｼｰ ﾆﾎﾝｷﾖｳｶｲ

2. みずほ銀行渋谷中央支店 普通預金
　口座番号/162-4945790
　口座名/社団法人国際IC日本協会

《編集後記》

今号は８月に開催した東アジア青年フォーラム、APYC、コー世界大会のレポートを中心に編集させて頂きました。各会議は来年も開催される予定ですので、ご関心のある方はIC事務局までご連絡ください。尚、本機関誌に関してご意見等がございましたら、（社） 国際IC日本協会までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。
編集企画委員：高橋久子、長野清志、海老原真美